

〔目的〕 これまでは、幾つかの実験住宅について大気浮遊粉塵に対するその調整機能について、遮断効果及びその粒径依存性を調べてきた。その中で遮断効果には気象要素や住宅構造が影響していることが明らかになった。しかし、これらの因子がどのように寄与しているかを明らかにするだけの系統的な観測データは得られていない。今回は前回に引き続いて、実験住宅に対する長期的な観測から、季節変化や気象要素に対するその調整機能を明らかにする。

〔方法〕 京都市北区の木造瓦葺2階建住宅について住宅内外の質量濃度（ピエゾバランス）、元素濃度（ローボリュームエアサンプラー、I N A A）を風向（自作風向計）、風速（熱線風速計）、気温・湿度（自記温湿度計）と同時測定する。主な装置は前回と同様にマイコンにつないで自動計測する。また観測に用いる部屋の換気量（C O₂ 法）を測定する。時期は春、夏、秋、冬の各季節に1週間程度行った。

〔結果〕 これまでに行った一連の観測からは以下の事が明らかになっている。1) 住宅内外の浮遊粉塵濃度は季節変化を示す。2) 住宅内外の質量濃度の比は大体1:2で、遮断効果が認められる。3) 室内粉塵濃度は、風向によっては風速と強い相関を示すように思われる。詳細については現在測定中のデータを含めて解析し報告する予定である。